名古屋芸大グループ通信

09 February 2009

News/topics
ニュース＆トピックス

音楽学部
- 名古屋芸術大学スペシャルコンサート「コンチェルトの夕べ」が行われました
- 平成20年度　音楽企画6 ザ・ルネッサンス21「月」が開催されました
- YOUNG JAZZ SUMMIT 2008 at NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS

デザイン学部
- 2008年度客員教授　ポール・ブリーストマン氏によるデザインワークショップ＆デザインレクチャー＆「Paul Priestman Small Exhibition」
- デザイン学部公開講座「カリグラフィからタイポグラフィへ —ラテン文字の源泉とデジタル化—」が行われました

美術学部
- 日仏交流150周年記念　サン・ヴァンサン大聖堂壁画『聖母の御眠り』模写展が行われました
- アートクリエイターコースの目玉「OHOC(オーホック)」など、一年間の課題作品を展示した「レビュー展」が行われました

人間発達学部
- 人間発達学部　文化創造セミナー「身体と心をつなぐふれあい遊び」が行われました

大学／大学院
- 第19回 生涯学習大学公開講座　開催期間:2008年9月～12月
  両キャンパスの講座の一例を紹介しました
  東キャンパス：木管五重奏の愉しみ
  西キャンパス：体験！リトグラフ～多色刷り石版画で作品を～

保育・福祉専門学校
- 学校祭・公開コミュニティー講座が開催されました

クリエ幼稚園
- 幼稚園児たちのゲイジツ展が行われました

滝子幼稚園
- 恒例の「クリスマス会」が行われました

Entexit
エンタジット

- 西キャンパスキャリアサポート情報 面接試験対策（面接対策講座・模擬面接）について
- 2月以降も出願可能な入試 一般B日程・センター利用後期・大学院Ⅱ期入試等出願受付中!!

Close up! NUA-ism
～進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-OG
社会性のあるデザインをやりたいんですよ
デザイン学部助手　濱田清絵

NUA-STUDENT
やっぱり子どもが、かわいいから
人間発達学部 子ども発達学科　2年　浦野いずみ
子どもとしてではなくて、人として
人間発達学部 子ども発達学科　2年　久保田絢也

コラムNUA
民衆の芸能がおもしろい
音楽学部教養部会 准教授　大田高輝

Master Artist
マスター＆アーティスト

たった一人のオーケストラ
音楽学部 准教授　鷹野雅史

Information
インフォメーション

- 2009年2月以降の主な行事・イベントスケジュール
- 編集後記

写真、版画、イラスト、アートブック…
さまざまな視覚メディアを表現する!!

Feature ＜特集＞
デザイン学科
メディア＆コミュニケーションブロック
メディアコミュニケーションデザイン
選択コース

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学グループ
http://www.nua.ac.jp

■名古屋芸術大学／大学院：音楽研究科　美術研究科　デザイン研究科
学部：音楽学部　美術学部　デザイン学部　人間発達学部
■名古屋保育・福祉専門学校／保育科　介護福祉科
■名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園
■滝子幼稚園

Feature

オープンキャンパス『デジタルフォト体験コーナー』（d・e）

祖父江慎氏（特別客員教授）による
＜ブックデザイン＞の授業（a・b・c）

レビュー展前審査（f・g・h）

フリーペーパー制作講評

美術館研修

写真、版画、イラスト、アートブック…さまざまな視覚メディアを表現する!!

デザイン学科
メディア＆コミュニケーションブロック
メディアコミュニケーションデザイン
選択コース

＜ゼラチンシルバーセッション＞
プロカメラマンによる特別講義

写真課題 講評風景

メディアが多様化し情報がグローバル化する現代社会では、ヴィジュアルイメージによるコミュニケーションの重要性が益々高まっています。メディアコミュニケーションデザインコースでは、写真、版画、コンピュータといった複製芸術メディアの技法を活用し、制作を通して新しいメディアの可能性を追求します。オリジナル性を重視しつつ複製を作ることのできる技術として、本、印刷、版画や写真、映像、CD 音楽などが用いられます。

メディアコミュニケーションデザインコースでは、独創的な作品を作る＜アート＞と多くの人に受け入れられるメディア＜デザイン＞をそれぞれ専門的に、また横断的に研究していきます。人間の豊かな感性と的確な伝達表現力で、＜アート＞と＜デザイン＞を繋ぎ、新しいデザインワークを目指します。

今回は、メディアコミュニケーションデザインコースを担当する先生、実際に学ぶ学生の声をご紹介しましょう。

制作風景

Concept Guidance

ーメディアコミュニケーションデザインコースの目標ー

メディアを自在に使いこなせるクリエーターを育成

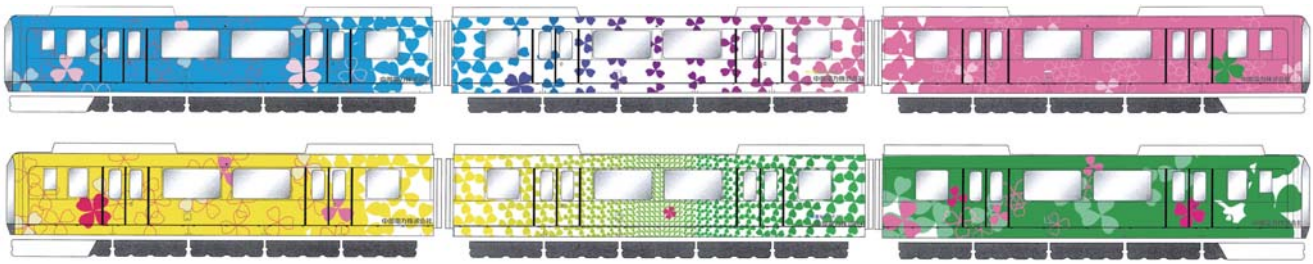
デザイン学部 准教授
櫃田珠実

根本のところではアートもデザインも違いはないと考えます。どちらも大切なことは、発想であったり創造することです。

メディアコミュニケーションデザインコースでは、２年次で写真、版画、ドローイング、デジタルグラフィックス、など様々なメディアの基礎的な表現技法を学びます。授業内容は、デザイン、アート、メディアに関する技法と理論です。またグループでの学外コンペ参加を積極的に授業に取り入れ、グループ制作でコミュニケーション力を身につけます。３年次には、コンピュータを使って本制作、Webなどのデジタルメディアデザインの研究と、これまで学んできた伝統的な表現技法を発展させて、オリジナル制作に取り組みます。そのために、一人ひとりの個性を最大限引き出し、個人の専門性を見出す多彩な仕組みが組み込まれたカリキュラムで指導が行われます。また、実社会で活躍されているアーティスト、デザイナーを非常勤講師や客員教授としてお招きし、直接実技指導に加わっていただくことで、学生達に刺激を与え、高い目標を持ち実践していく力を養うことを目指しています。オリジナル制作については、テーマ、コンセプト、を明確にしてプレゼンテーション（展示など）で提案方法を学び、思考と表現力を結びつけながら取り組んでいきます。

３年後期より就職活動に向けポートフォリオとしてのアートブックを制作し今後の活動に繋げていきます。最終学年では、それぞれの専門分野での研究を行います。前期で学外での発表展示やプレ卒制、後期は卒業制作に取り組みます。

このように、アートとデザインの垣根を持たない柔軟な創造力のある人材、様々なメディアを操り自在に使いこなせることのできるクリエーターの育成が本コースの目標です。



中部電力 リニモのラッピングデザインコンペ優勝作品『サチイロ＊』

Project LINIMO　リニモプロジェクト

ラッピングデザインコンペで優勝！

名古屋東部丘陵地帯を走る「リニモ」のラッピングデザインコンペは、中部電力広報部が企画し、次世代教育支援ならびに地域の文化振興を進める取り組みとして、芸術を志す学生が在籍する愛知県内５つの大学に向けて公募されました。

メディアコミュニケーションデザインコースで、<デザイン実技Ⅱ>の授業課題としてコース全員が３チームに分かれ、企画側のテーマ「HAPPY　Linimo～乗るといいことおきるかも！～」をもとに、<写真ー笑顔><漫画ー青い鳥><色彩ークローバー>の３つのコンセプトで制作をスタート。昨年７月10日に中部電力本社で行われた審査会では、プレゼンボードを作成し、コンセプトシートを提出するなど、２年生前期の学生にとって初めての学外でのプレゼンテーションに挑み、初挑戦で見事優勝を果たしました。

採択案となったサチイロ＊チームのデザインコンセプトは、車両全体に敷き詰められたクローバーの中に四葉のクローバー隠されていて、それをホームで待つ人や走行しているリニモを見上げた人が何気なく見つけてくれるよう、シンプルだけど誰でもが一度はやったことがあるゲーム的なインタラクティブ性を盛り込んでいます。またサチイロと名づけたように、心が躍るような心理作用をもたらす色彩を調べ、四つ葉にまつわる４色を配しグラデーションで融合させました。

初めてのプロジェクトデザインワークが、現実の社会に飛び出してしまい、驚きと戸惑いもありますが、中部電力広報部の方々ならびに、愛知高速交通（リニモ）の方からも高い評価を頂き大変よい経験となりました。

車内ポスター
ハッピーリニモ『サチイロ＊』

リニモ車内で記念撮影

表彰風景

Interview

メディアコミュニケーションデザイン選択コースの学生さんに集まってもらい、お話を伺いました。

当コースは、2008年の4月に開設された新しいコース。第1期生となる現在の2年生も、コースを選択して1年に満たない2008年末に振り返っていただきました。

安江珠美さん

稲富彩奈さん

原悠子さん

岩田真実さん

助手
石田典子さん

じっくりと考え、真摯に応えてくれる姿が印象的でした。

コースを選んだ理由は？

安江 高校が総合学科で、漫画の授業っていうのがあったんですよ。授業で漫画を描くんですよ、下書きから、ペン入れ、トーン貼ってとか。それで最初はイラストコースに入るつもりで、でも、なんか違うなとも思ってて、どうしようってなったときに、版画と写真で新しいコースができるよって聞いて、じゃあ新しいことをやってみようと、それで私は決めました。

稲富 私も高校の頃、美術科だったんですが、2年生の頃にデザインコースに入って、それからずっとデザインの勉強をしてきました。その高校の頃から、写真が好きで趣味で時々撮ったりしてたんですよ。何回かは、学校の先生にフィルムのカメラを借りて、自分で撮りにいったりして。大学へ入ったときは写真のコースはなくて映像しかなかったけど、近いものができるかなと思って最初はそのメディアデザインのほうへ行こうと思ってたんです。でも、新しく写真とかやるコースが増えるよと聞いて、このコースならいろんなことができるかなと、写真もできるし、イラストもできるし、好きなことの技術をもっと高められるかなと思って、選びました。

原 高校は普通科の高校だったんですけど、芸大を希望してまして、高2から美術研究所に通って、そこでデザイン科を志望しました。イラストしか、自分にはないだろうって、描くのが好きだったので。絵画的なものよりも、ポスターとか社会の中で使われているイラストだとか、雑誌の挿絵とかに惹かれまして。自分の内面を描こうとかじゃなくて、そういう方面に興味があったから、それだったらデザイン科だなと思って。コースを選んだのは、ほぼ直感で（笑）、ぎりぎりまでイラストコースと、あとテキスタイルコースと迷ってて、他のコースの課題を見て、自分のやりたいこととは少し違うかなと思えてきて、どうしよう、どうしようと思って、ここの課題を見直してみたら、ここしかないかみたいな（笑）。入ってみたら楽しいですね。メンバーが粒ぞろい（笑）。みんななんか変で、独自のものを持っていて、それなりばらばらだけど、協調しあってる。

一同 濃いよね（笑）。

稲富 みんな個性いっぱいあるけど、すごいまとまってると思いますね、不思議と。

一同 不思議だよね（笑）。

岩田 入学してみて、自分はどっちかっていうとアート的なことをしたいっていうのが強かったので、なんでデザイン科へ来ちゃったんだろうってちょっと思ってしまって、それで、コースを選ぶとき、どれもピンと来なくてどれでもいいやって考えてました。どこに入っても、自分が選ぼうと思ってたら表現の幅っていくらでもあるんだなと思ってて、そう考えたらどこでもいいかなって思ってたんです。そうしたときに櫃田先生から「あなたが目指してるところはここだよ」と誘われて（笑）、何でもできるからいってみようと。

どんな課題をやったの？

安江 木版と、

稲富 銅版と、

安江 リトグラフ、

稲富 それと、シルクスクリーンもやりました。

石田 それから写真。版画は、基本的な技法は全部、一通り1年でやるようにしてて、写真も暗室で紙焼きをやっています。2年次の後期は技法の授業が中心です。

安江 前期はブックデザイナーの祖父江慎先生に来ていただいたのでその関係で祖父江慎さんを紹介するA4サイズフリーペーパーと、一人1冊本をつくるブックデザインの課題がありました。InDesignというソフトを教えていただき、文字組までやりました。小説を選んだ人は、文字を全部入力して…。「インデザイン」と「イラストレータ」はかなり上達したと思います。

石田 そのまま売り物になる状態までデザインした人もいましたし、作り込んだ課題です。

安江 自分で糸でかがってって製本した人や、業者さんで製本してもらったりする人もいました。

このコースを選んでよかったことは？

安江 私は、版画とか写真とか、あまり経験がないですから、今までやってないことができたっていうのは、自分の新しい可能性っていうか、できることが増えて、作れるものが増えて、追求できるものが増えてよかったなと思います。

稲富 イラストに行ったら、もうほんとうにイラストやるしかない。他のコースは、特化されたものをとにかく突き詰める感じだけど、このコースだといろんなことが体験できて、その中から如何に自分に合ったものがどれかとか、再発見できたりそういうことができるのがよかったかなと思ってます。

原 私は、ずっとイラストを描き続けてて、もうペンで描いたり、水彩で描いたりと技法も試してる上で、版画とか写真とか、自分の今までのイラストをベースにそういう表現を学ぶことで、世界が広がったり、新しい線との出会いとかあったりして、それがすごく魅力的だなと思います。

岩田 デザインとアートの真ん中辺りというのにすごく興味があったんで、そういう意味でフィーリング的に自分の今やりたいことが一番できてるんじゃないかと、なんかそういう充実感みたいなのはあります。

作品のボリュームと完成度に驚きます。すごく一生懸命に取り組んでるよね？

安江 やる人はやるし、最初に「あっ、がんばってるな」っていうのを見ると、頑張ってる！すごい！私もがんばんなきゃ!! みたいな感じで（笑）。

稲富 触発されるところはありますね。

一同 うん、うん。

安江 そう、ちょっと伝染して（笑）。

稲富 やっぱり、やってて、課題ができなくて、どうしよう、どうしようってなってる中で、それでも頑張ってる人って、すごい目立っていて、わかるんです。そういうの見てると、「こんなんじゃ自分ダメだ」と思って、やらなきゃって（笑）。

石田 今年度は特に、祖父江先生と、後期にはシルバープリントセッションでプロのカメラマンの人たちに来ていただいて、刺激される部分もかなりあったんだと思います。第一線で活躍されている人に会えて私も、個人的に刺激的でした。

西キャンパスキャリアサポート情報

面接試験対策（面接対策講座・模擬面接）について

就職採用試験には、履歴書・自己紹介書やエントリーシートなどの「書類選考」や一般常識・時事問題・論作文・適性検査などの「筆記試験」、そして「面接試験」があります。

当たり前ですが、採用試験において「面接試験」を行なわない企業は一つもありません。それだけ「面接試験」は重要な試験です。就職活動のメインイベントといっても過言ではないと思います。

進路相談等で学生の方と会話をしていると、とても魅力のある学生だと感じることがよくあります。しかし、いざ面接試験になると、その学生の魅力のほんの少ししか相手に伝わらないということが多々あります。学生の方のなかには「熱意があればなんとかなるだろう」と考えられる方もいるのではないかと思われますが、面接試験では、その熱意を相手に伝えることができなければ何の意味もありません。では、その熱意を相手に伝えるためには、どうすれば良いか。それは、面接のポイントを理解し、面接の練習を何度もするということが非常に重用になってきます。

名古屋芸術大学では、３年生を対象とした就職ガイダンスにおいて「面接試験対策講座」を実施しています。基本的な集団面接や個人面接から、企業によっては今や必須となってきているグループディスカッションやグループワーク等の面接の種類、面接で必ず聞かれる、自己ＰＲ・志望動機・学生生活に関する「３大質問」、その他の頻出質問や変則質問の答え方、圧迫面接の対応等について説明をします。例えば、面接で「あなたは当社には向いていないようですが」とか「成績が悪いのはどうしてですか」というような精神的に追い詰められる、圧迫面接というものがあるということを知っているか否かでは、質問をされたときの対応に大きく差がでてくると思います。「面接対策講座」で面接試験のポイントや対策法について事前に理解して面接試験に備えていただきたいと思います。

また就職課では、希望者の方には個別で「模擬面接」を実施しています。「模擬面接」は、就職情報コーナーとは別の部屋を使用して行ないます。実際に入室から面接、退出まで一連の流れを体験することで、面接での良かった点・悪かった点などを実感することができると思います。スタッフから、マナー・声・表情等についてのアドバイスや個々の質問に沿ったアドバイス等もさせていただきます。この、「模擬面接」は一人何回でも申し込んでいただいても結構です。例年一人で３回・４回と「模擬面接」を受けられる意欲的な学生の方もみえます。何回も受けられる方は、回を重ねる度に、スムーズに会話ができるようになり、自分の考えもまとまり、表情に自信と輝きが出てくるように感じます。本番の面接試験前に「模擬面接」を受けてみてはいかがでしょうか。

当然のことですが、面接試験は誰もが緊張します。企業は学生の皆さんを面接しますが、学生の皆さんも、その企業を面接するような気持ちで面接に挑んでいただくのも良いと思います。

最後に就職課では随時、就職や進学に関する進路相談を受け付けていますので、気軽にご利用ください。

2月以降も出願可能な入試

一般B日程・センター利用後期・大学院Ⅱ期入試等出願受付中!!

学部／大学院	入試種別	出願期間	試験日	合格発表日
音楽学部	B日程入試	2月25日～3月19日	3月25日	3月26日
大学院音楽研究科	B日程入試	2月25日～3月19日	3月25日	3月26日
美術学部	B日程第一方式（セ併用）	2月19日～3月6日	3月17日	3月19日
美術学部	B日程第二方式（一般）	2月19日～3月6日	3月17日	3月19日
美術学部	センター利用入試（後期）	2月19日～3月6日	センター試験のみ	3月19日
大学院美術研究科	Ⅱ期入試	1月29日～2月12日	2月21日	2月27日
研究生・研修生	研究生入試・研修生入試	1月29日～2月12日	2月21日	2月27日
デザイン学部	B日程入試	2月19日～3月6日	3月17日	3月19日
大学院デザイン研究科	Ⅱ期入試	1月29日～2月12日	2月21日	2月27日
研究生・研修生	研究生入試・研修生入試	1月29日～2月12日	2月21日	2月27日
人間発達学部	センター後期入試	2月20日～3月9日	センター試験のみ	3月18日
人間発達学部	一般B日程入試	2月20日～3月9日	3月14日	3月18日

Close up!
進化する「名古屋芸大」のDNA
NUA-ism

①『飛行機内における「食」デザイン』高齢者とCAのための機内食、ドリンクサービスの提案。

身の周りの紙をブックカバーとして使うための定規キット。手軽に包装紙がリサイクルできる。

鞄メーカーでの作品。メーカー勤務は大きなスキルアップになったという。

社会性のあるデザインをやりたいんですよ

Vol.11
NUA-OG
濱田清絵

1982年　（昭和57年）、愛知県生まれ。
2004年　美術学部 デザイン学科 インダストリアルデザインコース卒業。
2004年　卒業制作（名古屋芸術大学買い上げ）で「第4回ラッキーストライク・ジュニア・デザイナー・アワード」審査員特別賞 ー榮久庵憲司賞（写真①）
2007年　ダイソン「womanfuman.com2007：生活改善、暮らしを変えるデザインアイディアコンペティション」Bronze Award
2008年　防災用具『ONSUI【温水】』で、第6回国際コンペティション「名古屋デザインDO! 2008」グランプリ（写真②）

卒業後、デザインオフィスから鞄メーカーへ出向社員として勤務。現在、本学デザイン学部助手を勤める。

②『ONSUI【温水】』

デザイナーズマンション、デザイナーズ家具…、現代ではあらゆるものにデザイナーの手が入り、そのことをセールスポイントに置いた商品が広く販売されている。洗練された製品を手軽に入手できることは、本来、喜ばしいことのはずなのだが、それらの商品は、なぜか“薄っぺら”な印象しか与えてくれないように感じないだろうか。すべてがそうだとは言わないが、多くのものが、軽薄な存在感しか持っていないように思われる。見慣れてしまったからか、あるいは、ある種の雛形に則ってデザインされているからか？　軽薄さの理由がなぜなのか、そんな疑問を解いてくれた。

取り出した試作品２つ。国際コンペ「名古屋デザインDO!」グランプリ受賞の『ONSUI』の試作品である。

「発熱用のスティック状のカートリッジがありまして、蓋にツメみたいのがあるんでここに引っかかって、中に発熱用のスティックが入るとお湯が沸くんです。カップでお燗ができるお酒と同じ原理ですね」

ONSUIは、防災用具として考えられている。「備えあえば…」というは易いが、どれほどの人が実際に防災用具を備えているだろうか。

「普段は、ドリンクポットとして使うんですよ。防災用具って、実際には備えたりとかって意外にしないものじゃないですか。それをどういう風に備えようかなって思ったときに、普段から道具として使ってもらおうと考えて」　日常に溶け込み、意識しないでもイザという局面では別の機能が使えるよう設計されている。「災害のとき、お湯がポイントになっているということがわかりまして、お湯があれば、湯煎もできますし、カップ麺もできますし、まぁ、必要だったら体も少し拭いたりだとかできますし…、ライフラインが断たれてもお湯が沸けば少しは凌げるかなと」

順を追った思考過程、いわば必然が形になっている。そう思ってみれば、過去の作品もすべて、ユーザーの問題とその解決法が、形となって現れている。そこには、デザインのためのデザインや、形のための形など、軽薄な概念が入り込む余地はない。骨太で強い形。

「私は、困っていることを解決したいって、社会性のあるデザインをやりたいんですよ」

普通科の高校を出て大きな目的も抱かず進んだデザインの道だったが、１年生の課題で大きく変わった。「器用じゃないし。自分は、それまで立体とか、やってこなかったので、カバーする分、休みの期間にやろうと。春休みから和田先生のところへ通い詰めて…」

正攻法的な考え方、問題解決の方法は、その頃から体に染み付いているのだろう。デザイナーを目指す人にアドバイスを問えば「私が、大丈夫だったから大丈夫としかいえないですよ（笑）。貪欲に、丁寧にこなしてくだけなんですよね。コツコツやるしかないんですよ」熟考して答えてくれた。

平成19年4月、短期大学部保育科を発展的に解消し新設された人間発達学部。今回はその第1期生にあたる2年生の学生にお話を伺った。小学校教諭1種免許状、幼稚園教諭1種免許状、保育士資格と、教育者・保育者としての資格が取得できる学科ということもあり、明確な目的意識と、日々忙しくカリキュラムに取り組む学生たちの姿が浮かび上がってきた。

やっぱり子どもが、かわいいから

Vol.12
NUA-STUDENT
浦野いずみ
人間発達学部
子ども発達学科　2年

夏休みを利用して姉妹校の韓国、慶南大學へ留学。「外国にも興味があるんです」

考えながら、言葉を選びながらゆっくりと話し始めた。「じつは私には、今はもう亡くなってしまったお兄ちゃんがいまして、そのお兄ちゃんは自閉症を持っていたんです。母からお兄ちゃんの話を聞かされたことが、障害のある子も看られるような保育士になりたいって思うきっかけになっています」決して話し上手とはいえないが、それだけに話す言葉にしっかりとした考えや意思が伝わってくる。

「母は、施設じゃなくて近所の友達と同じ保育園へ入れてやりたくて園長先生に相談して、理解のある先生だったらしく受け入れてもらって普通の子と仲良く遊べて…。残念ながら私が生まれる年に、お兄ちゃんは事故に遭ってしまって…。だから、直接は知らないんですけど、母の話で障害児教育への関心が高まっていったんです」

人間発達学部では主だったものでは3つの資格が取得できる。その3つともを取得すべく1年の時から多くの科目を履修し、忙しい毎日を過ごす。「毎日、朝の最初の授業から4時までは学校にいます。曜日によっては5時半まで授業ですが、これでも2年になってちょっと余裕が出てきたって感じなんですよ」

学部の特徴としては、1年から実習があることが上げられる。授業で学んだことが、実習の場で経験として、より深く刻まれる。「授業で習ったことと、実習とは違うんですけど、やっていくうちに、ああこれが授業で習ったことなんだなと、だんだん繋がっていくというか。大変だけど、楽しかったですね。やっぱ子どもがかわいいから」

学業以外では和太鼓部に入っているとのこと。それが何よりの楽しみだとか。芸大祭では実行委員も務め、学生生活に大きな充実を感じていると話してくれた。ぎこちなかった表情が、柔らかな笑顔に変わって行く。一途な心が伝わってきた。

子どもとしてではなくて、人として

小学校教諭を目指すのが一般的な男子学生の中にあって、幼稚園教諭が目標という。その理由を伺うと「僕が言うことじゃないですけど…」と前置きして話し始めた。「社会的にいろいろと問題が起きるじゃないですか。そんなときに、僕の母親は、問題の根本は、一番土台の幼児のときの教育とか、保育のときの教育とかあるって感じてたみたいで、それをよく聞かされていたんです。それに影響を受けたというのがあります。それから、僕は男ばかりの3人兄弟の次男なんですが、自分で言うのもなんですが、弟の面倒見が結構よかったみたいで。ちっちゃい子達、小学校のときって地域で班で登校するじゃないですか、そういうことでも自分は結構楽しんでたみたいなんですね。そんなこともきっかけになったんじゃないかと思います」　幼稚園教諭が志望なのだが、履修はそれだけにとどまらず、3つともの資格を取得できるカリキュラムを選択している。「この道を選んだときによく聞かされたのが、保育園と幼稚園と小学校の連携です。そのつながりはすごく大事なのかなって思って、できるのならやっておこうと思って」　かくして、可能な限り授業を受ける、忙しい日々を送る。

現在は、家族と離れて名古屋に赴任する父親との二人暮らし。父親を気遣って、勤務地の近くの本学を選ぶという家族思いのやさしさ。父親、よき理解者である兄、家族への素直な感謝の言葉がごく自然に溢れ出る。この思いは、子どもたちへも変わらない。「子どもを子どもとしてみないって、自分で決めてるんです。人として接しようということなんですが、子どもたちから学ぶことがすごくありますね。子どもたちの何事にも必死にやることとか、見ていて自分でもすごい、自分もまだまだこんなものじゃないって思ったりするんで（笑）」　子どもたちから、大きな励ましももらっていると目を細めた。

Vol.13
NUA-STUDENT
久保田絢也（じゅんや）
人間発達学部
子ども発達学科　2年

音楽学部

名古屋芸術大学スペシャルコンサート『コンチェルトの夕べ』が行われました

2008年12月4日、「名古屋芸術大学スペシャルコンサート『コンチェルトの夕べ』」が、名古屋市中区のしらかわホールで開催されました。

このコンサートは、演奏学科ピアノコースの「卒業生のための演奏会」と、弦管打コースの「若いソリストのための協奏曲の夕べ」を昨年度から一緒にして開催しているもので、今年も多くの応募者の中から9月に行われたオーディションで選ばれた8名が出演しました。

本学教授古谷誠一の指揮する名古屋芸術大学オーケストラをバックに、ピアノコース卒業生からは、現在、大学院の実技補助員をされている尾関　愛さんと吉田裕受子さんが、モーツァルトの「ピアノ協奏曲 第21番 ハ長調 」を、山西良志子さんと川満知美さんが、ベートーヴェンの「ピアノ協奏曲　第1番 ハ長調」をそれぞれ演奏しました。

弦管打コースからは、ヴァイオリンで4年生の近澤知世さんがドヴォルザークの「ヴァイオリン協奏曲　イ短調」を、ハープでは研究生の髙田知子さんがピエルネの「ハープと管弦楽のための小協奏曲」を演奏しました。また、ヴァイオリンでは、名古屋市立菊里高校1年生の髙橋奈緒さんが、シベリウスの「ヴァイオリン協奏曲　ニ短調」を、同高2年生の春日井　恵さんがラロの「スペイン交響曲　ニ短調」を演奏しました。

家族や友人また関係者の見守る中、晴れの舞台で精一杯の演奏をする出演者に惜しみない拍手が送られていました。

音楽学部

平成20年度　音楽企画6 ザ・ルネッサンス21「月」が開催されました

今年で6回目を迎えたコンサート“The renaissance21”は、名古屋芸術大学音楽部 音楽文化創造学科主催により、2008年12月16日、しらかわホールで開催されました。毎年学生達が自主的に創りあげており、オーケストラ演奏と巨大スクリーンによる映像とを融合させた、21世紀型の新しいコンサートとなっています。今回は「月」をテーマに、幻想的な世界が繰り広げられました。

音楽と映像の融合で、21世紀型コンサートが誕生

The renaissance21「月」は、指揮者としてオーケストラやオペラをはじめ、ミュージカル、合唱の指導などさまざまな分野で活躍する若手指揮者スティーブン・シャレット氏をお招きし、セントラル愛知交響楽団による演奏で行われました。企画・運営を音楽ビジネス・マネージメントコース、演出を音楽療法コース、楽曲制作をサウンド・メディアコースを中心に作曲・理論コース、大学院音楽研究科など、音響・録音をサウンド・メディアコースが担当。今回のテーマである「月」が、オーケストラを媒体として現代テクノロジーを交えた映像により表現されました。

プログラムは1部「月の宴」、2部「月の雫」という構成で、1部では9曲、2部では10曲が演奏されました。1部では、水面を思わせるブルーのライトのなかイルカの調教師が登場する楽曲や、舞台下でドレス姿の男女がダンスをする演出の楽曲などがあり、聴衆は音楽とともにパフォーマンスを楽しみました。

休憩を挟んだ2部では、全体を通して『竹取物語』のストーリーが影絵風になってスクリーンに映し出されました。月のイメージがかぐや姫で表現され、幻想的な雰囲気を醸し出していました。

また、来場者にはハガキサイズの紙とペンが渡されており、大切な人へのメッセージを記入して回収され、最後の楽曲の演奏とともにスクリーンに映し出しました。「お父さん　いつもありがとう」「○○ちゃん　いつも頑張っているね。応援しています」などと書かれたメッセージがスクリーンに映し出されると、会場はあたたかい雰囲気に包まれました。

プログラム開始前と休憩時間には、同ホールのホワイエでハンドベルの演奏も行われ、透き通るような音色に、会場を訪れた聴衆もしばし足を留めて聞き入っていました。

会場を埋めた聴衆は、すばらしい音楽と映像のコラボレーション、そして独創的な演出という、新しいコンサートスタイルを楽しみました。

オーケストラの演奏風景がスクリーンに映し出される

2階ギャラリーから合唱が加わる楽曲も

舞台下でのダンス、バイオリンの演奏が行われた

着物姿で熱唱

『竹取物語』が絵本を繰るようにスクリーンに映し出される

来場者が書いたメッセージが映し出される

音楽学部

YOUNG JAZZ SUMMIT 2008 at NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS

この冬一番という寒波が訪れた2008年12月26日（金）、名古屋芸術大学東キャンパス3号館音楽講堂ホールで「YOUNG JAZZ SUMMIT 2008」が開催されました。これは名古屋市内の中学生、高校生、そして名古屋芸術大学音楽学部の学生たちによる演奏で、RADIO-iの公開録音という形で行われ、当日の模様は2009年1月12日（月・祝）の12時～12時56分に、「YOUNG JAZZ SUMMIT 2008 at 名古屋芸術大学」としてオンエアされました。

会場が一体となり手拍子、ジャズの祭典を楽しむ！

今回出演したのは、名古屋市立若葉中学校「ジャズアンサンブル部」、名古屋市立本城中学校「HONJO JAZZ ORCHESTRA」、名古屋市立守山西中学校「ジャズアンサンブル部」、名古屋市青少年ビッグバンド「Free Hills Orchestra」、愛知中学校・高等学校「吹奏楽団」、名古屋市立工芸高等学校「工芸ハイソニックジャズオーケストラ」、名古屋市立工業高等学校「吹奏楽部」ブルーボーンジャズオーケストラ、名古屋芸術大学音楽学部「The Funk Lovers Society」の8つのバンドで、それぞれ3～5曲を演奏しました。

午後3時の開演前から、学生はもちろんその父兄や一般の方々も大

勢訪れ、会場は熱気に包まれました。今回はRADIO-iの「i-Stream Gold」パーソナリティとしておなじみのデヴィット・ヤナセさんが司会を努め、軽妙な話術で会場は大きく盛り上がりました。

まず、名古屋芸術大学から「The Funk Lovers Society」が登場し、ソウルフルな演奏とヴォーカルを聴かせてくれました。そのあとは中学校、高校と続きます。揃いのブレザーやTシャツ姿、思い思いのコスチュームに身を包み、ステージ上には個性的なビッグバンドが次々と登場しました。サックス、トランペット、キーボード、ドラム、トロンボーン、パーカッション、ベースなど、さまざまな楽器を操り、カウント・ベイシーの名曲「Corner Pocket」や往年の名曲「Autumn Leaves」、ビートルズの「Hey Jude」、または「ALICE IN WONDEWLAND」「ルパン三世80'」「MISSION:IMPOSSIBLE」といった若者らしい選曲の軽快な曲などが演奏されました。

中学校では、名古屋市立若葉中学校のジャズオーケストラ部は、名古屋で一番歴史が古いジャズバンドといいます。神戸で開催された「japan student jazz festival 2008」ではスウィング賞を受賞した実力です。また名古屋青少年ビッグバンドは、東海地方で唯一学校に所属しないビッグバンドです。中学生・高校生を中心に2001年に結成され、現在部員は約50人。毎年40数回のライブをこなす本格バンドです。

個性豊かな8つのバンドが、心弾むロック調のジャズや、しっとりとしたムードいっぱいのジャズなど、それぞれ得意なライブステージを繰り広げました。曲目によっては、サックスやトランペット、トロンボーン、ドラムなどのソロがまじり、観客も手拍子で合わせたり肩を揺らしたりして聴き入っていました。また、デヴィット・ヤナセさんと出演者とのユーモアあふれるおしゃべりもあり、観客と演奏者が一体となって、時間を忘れて数々のスウィングジャズを楽しみました。

司会のデヴィット・ヤナセさん

名古屋芸術大学
「The Funk Lovers Society」

名古屋市立若葉中学校
「ジャズアンサンブル部」

名古屋青少年ビッグバンド
「Free Hills Orchestra」

名古屋市立守山西中学校
「ジャズアンサンブル部」

「The Funk Lovers Society」
リーダー　**山崎貴大**さん

デザイン学部

2008年度客員教授　ポール・プリーストマン氏による デザインワークショップ＆デザインレクチャー ＆「Paul Priestman Small Exhibition」

名古屋芸術大学デザイン学部では、ヨーロッパを中心に活躍するプロダクトデザイナー、ポール・プリーストマン氏を客員教授にお迎えし、2008年10月30、31日にデザインワークショップ、11月1日にデザインレクチャーを開催しました。また、11月1日（土）から14日（金）まで、これまでの代表作の開発プロセスを展示する「Paul Priestman Small Exhibition」を併せて開催しました。今回はワークショップとデザインレクチャーの様子をご紹介します。

チームを組んでバッグをデザイン

11月1日のデザインレクチャーでは、2日間のワークショップについての説明と講評を述べ、その後プリーストマン氏自身のデザインについて、作品制作の流れや開発秘話などについて紹介しました。

デザインワークショップでは、学生30人が5つのグループに分かれバッグを制作するという指示が与えられました。「クライアントから依頼され、納期を守るという雰囲気を味わってもらいたかった」と言います。「自分に合うバッグを見つけるのは難しい。誰がどんな状況で使うかプロファイリングをすること。そして既存の製品と自分たちが制作するバッグの特徴はどこかということを明らかにして、そのためにはどんなデザインが必要かを考えてほしい」ということでスタートしました。

各グループでは、詳しく使用者を設定、ディスカッションを重ねました。その上で3タイプのデザインを描き、その中から1つに絞りコンセプトを明確にする作業をし、それをもとに実物大のモックアップを制作して、プレゼンテーションを行いました。プリーストマン氏は、「チームワークが良かった。実際の仕事でも、デザインはチームで動くもの。グループ間を回ってさまざまな作業を見て作業分担の指示を出しました。とても充実した2日間だったと思います。私もみんなと仲間のつもりで過ごせました」と話しました。

大事なことは"ディテール"

次にプリーストマン氏は、自身の会社が携わったプロジェクトについて紹介しました。各国から若いデザイナーが集まり、総勢25人のデザイナーがチームを組んで、キッチンで使う小さなものから航空機のような大きなものまでのプロダクトデザインを作り出すということです。小さなものでは、パスタ、包丁立てなど、生活に密着したデザインを次々披露。デザインを考える際には、さまざまな業界や分野もリサーチして良いものを取り入れるというプロセスをたどってから、実際のデザインにとりかかるといいます。

大きなものでは、鉄道の車両デザイン、A350エアバス内部のデザインなどを紹介しました。A350エアバスでは3Dデータをもとに作成したアニメーションを見ながらの説明となりました。壁の色は照明で調整、ヘッドレストの布には光ファイバーを織り込み色を替えることができるようにし、キャビンにイルミネーションが点灯するなどディテールに凝ったプロダクトデザインを披露し、ディテールの仕上げが大事であると強調しました。また、どのような依頼であっても、膨大なリサーチをしてチームワークでより良いものを作り出すというプロセスは変わらないといいます。

ドローイングが大事

質疑応答では、「仕事が拡大していく秘密は？」という問いに、「学び続けること、一生懸命働き続けること、チームワークを楽しむこと、寛大であること、ポジティブに考え自分の人生をつくっていくこと」と答え、笑顔を見せました。また、「ドローイングが大事であり、デザイナーの考えはスケッチで見せるのが一番早い。スケッチブックをいつも持ってスケッチしてください」と答え、実際に手を動かして描くことが最も大切であるとアドバイスしました。最後に、「国際人であってほしい。これから世界はますます小さくなる。多文化というマインドを常に持ってほしい」と話し、デザインレクチャーを終了しました。

「Paul Priestman
Small Exhibition」にて

グループに分かれ、"誰のためのバッグ"を作るのかディスカッション中

プリーストマン氏

「泡」という名前の丸いパスタ

ふたつに開いて洗える包丁立て

エアバス380のスケッチ

デザイン学部

デザイン学部公開講座
「カリグラフィからタイポグラフィへ―ラテン文字の源泉とデジタル化―」が行われました

名古屋芸術大学デザイン学部では、2008年11月14日、姉妹校である英国ブライトン大学から、ジェラルド・フロイス教授と河野英一教授をお招きし、「カリグラフィーからタイポグラフィーへ、ラテン文字の源泉からデジタル化への発展」をテーマに講演会を開催しました。ジェラルド・フロイス教授は英国カリグラフィーの大家であるとともにエドワード・ジョンストン協会会長であり、河野英一教授はロンドン市と交通局のロゴタイプ「ニュー・ジョンストン New Johnston（ジョンストン・サンズ Original Johnston の改作 1979?80）」や Windows Vista の標準日本語フォント「メイリオ Meiryo」を制作されたタイポグラフィーを中心に活躍されているグラフィックデザイナーです。お二人の講演の模様をお伝えいたします。

アルファベットの芸術と機能：19世紀末、エドワード・ジョンストンによる最も自然で美しい手書き文字の再発見が与えてきた現代書体への限りなき影響とは？

まず河野教授がご自身の経歴を交えながら、カリグラフィーの歴史やエドワード・ジョンストン協会についてなどを紹介しました。河野教授は、文字やデザインについて基礎から勉強してみたいという強い気持ちから、会社を辞めてロンドン・カレッジ・オブ・プリンティング（現ロンドン芸術大学 University of the Arts London／ロンドン・カレッジ・オブ・コミュニケーション）へ入学しました。「今から30年以上も前、日本である外資系会社の仕事をしていた時、欧州の印刷物の組版を見るととても美しく読みやすい感じで、日本の印刷物の欧文組版とは違うことに気付き、それがどのように違うのか興味を覚えたのが始まりです」。デザインに興味はあったけれどデザイン教育を受けておらず、会社の業務で制作したカタログなどを作品として提出し入学を許可されたということです。

次にアルファベットの手本になる文字ということで紹介したのが、ローマ時代のトラヤヌス帝による記念碑に刻まれている大文字書体で、その完成度の高さから「すべてのローマン・アルファベットの永遠の源」との評価が与えられています。その後８、９世紀のカロリング朝ルネサンスを経てブロード・ニブ（先が幅広の）ペンによる書きやすく読みやすい小文字が完成度を高めていったということです。しかし、1450年頃の活版印刷術発明以後、本作りは活字による機械化に一変し、手書き文字の「書きやすく読みやすい、自然な美しさと機能的なスタイル」は忘れ去られ、18世紀までには「流れるように繊細で優美な装飾的スタイル」へと変遷しました。19世紀末になると、思想家・詩人・デザイナーであるウィリアム・モリスが、職人的な手仕事の復興を目指したアーツ・アンド・クラフツ運動を提唱。20世紀の世界のデザイン界に幅広い影響を与えました。

そのようなときに登場するのが、エドワード・ジョンストン（Edward Johnston 1872―1944）です。カリグラフィーを独学で始めた後に、開設予定だったロンドン中央美術工芸学校の装飾技術コースの講師として抜擢され、併せて大英博物館で様々な古写本を学びました。そして今も欧文書体の基本スタイルと見なされる「ファウンデーショナル・ハンド foundational hand」を考案。さらに1906年には不朽の名著と称される書体使用法の教習本「Writing & Illuminating, & Lettering」を完成し、以後1960年代まで広く欧米のデザイン学校で必須の教科書として使用されていたということです。

しかし、70年代以降は写真植字や急速なコンピューター化により、ジョンストンが説いたABCの「書」の精神と「手」を使って技術習得することが軽んじられる傾向にあり、河野教授はフロイス教授とともに「エドワード・ジョンストンの研究成果と彼が後世に与えうる影響」をタイトルにしたプロジェクトを進めているということです。

英国南部のサセックス州にあるエドワード・ジョンストン協会は、アルファベットを中心に文字研鑽の場を築いていくことを目標にしています。カリグラフィー・書字法を芸術として学ぶと同時に、レタリングやタイプフェース・デザインのために文字の源泉・基準を学ぶ大切な意義を、世界に広く喚起していくために活動をしています。

次に同協会の会長であるフロイス教授がエドワード・ジョンストンについて様々な書体の変遷などを、スライドで紹介しました。フロイス教授直筆という地図を紹介し、文字の大きさや位置を微妙に調整しながら、読みやすい地図を制作できると説きます。

またジョンストンについて、「数学や哲学にも造詣が深く、分析力があり、古い書物を調べて竹や羽根を用いてペンを作り、長い歴史の中で進化した文字の在り方を実際に確かめた」と話します。欧米では「書籍作りは知的財産を永続させる宝物」として重要視されるため、文字に対する意識も特別なものがあるといいます。

ジョンストンが作成した「Writing & Illuminating, & Lettering」は、欧米のデザイン教育界に影響を与えてきましたが、日本では2006年に『書字法・装飾法・文字造形』として翻訳されました。

ジョンストンは、1916年以来ロンドン地下鉄の駅名サインなどに広く使われてきた「ジョンストン・サンズ」でも有名です。産業革命を経たヴィクトリア時代の非人間的商業主義を立てに単に目立つための強烈で柄の悪い書体が続出していましたが、バランスよく優雅で読みやすいサンセリフ書体を目の当たりにして欧米のデザイン界はショックを受けたと話します。「ジョンストン・サンズ」は、その後に続出し現在でも最もよく使われるサンセリフ書体「Gill Sans」「Futura」「Helvetica」などの大先輩と言う訳です。

現代でもアルファベット書体の基本形といわれるトラヤヌス帝の碑文を基にして多くの新しいデジタルフォントが作られており、例えば、アドビ書体のフォント「Trajan」などは「とくに文字の形が美しく、映画のタイトルなどでもよく見られる」と話します。また、ジョンストンがデザイン学校で教えた際の黒板に描いた文字、太さや材料が様々なペン、フロイス教授自身が文字を描く様子、エドワード・ジョンストン協会に収蔵している作家の作品などをスライドや動画で紹介。講演の最後にフロイス教授は、これからのデザイナーに望まれることは、 表面的スタイルに固執するのではなく、文字の基本形「ファウンデーショナル・ハンド」の意義をよく理解する努力から、個々に独自な新しいデザインの可能性を発見できるはずだというメッセージを残しました。

河野英一教授と
ジェラルド・フロイス教授

イギリス時代の話をする
河野教授

イースト・サセックス州の
地図（フロイス教授の手書き）

トラヤヌス帝の碑文

羽根ペンを持つ
エドワード・ジョンストン

ジョンストン作の
ロンドン地下鉄の書体

フロイス教授のライティング

ジョンストンが
教授した際の板書

エドワード・ジョンストン協会に
収蔵されている作品の一部

美術学部

日仏交流150周年記念 サン・ヴァンサン大聖堂壁画『聖母の御眠り』模写展が行われました

名古屋芸術大学日本画コースは、フランス文化省公認壁画修復家でありフレスコ画家の高橋久雄先生のご尽力とご指導のもと、フランスのシャロン・シュール・ソーヌ市にあるサン・ヴァンサン大聖堂祭室内のフレスコ壁画『聖母の御眠り』図を、市当局より特別に許可を頂き、現地や大学内のアトリエで、2年の歳月を掛け原画の醸し出す雰囲気を大切に制作し、原寸に近い大きさで模写し完成させました。

2008年6月より、日仏交流150周年記念に合わせて、パリ・ユネスコ本部を皮切りに、現地であるシャロン・シュール・ソーヌ市をはじめ、日仏両国で多くの皆様のご協力の下、巡回展を開催してきました。

日本国内では、高橋先生が埼玉県のご出身であることから川越市立美術館で、2008年11月26日から12月7日まで開催。この展覧会には、高橋先生ご自身のフレスコ画も展示されました。東京展は新宿文化センターで、12月10日から12月14日まで開催。

開催に先立つ12月9日には、在日仏大使、前駐仏ユネスコ大使、元駐仏大使などの来賓と関係者をお招きして、オープニングレセプションが行われました。名古屋展は、本学西キャンパスアート＆デザインセンターで、2009年1月14日から1月20日まで開催されました。

東京展では、関連イベントとして、12月10日（水）に高橋先生による講演会が同会場で行われ、フランス中世壁画修復の現状とユルスリーヌ塔スレスコ壁画創作に関するお話がありました。また、『フレスコ画を描こう』というテーマのワークショップが、東京展は昨年12月13日(土)、名古屋展では本年1月18日(日)に行われました。この模写展は、新聞社、テレビ局など多くのマスコミにも取り上げられ、日仏交流150周年記念にふさわしいイベントとして成功裏に終了しました。

東京展

名古屋展

美術学部

アートクリエイターコースの目玉「OHOC(オーホック)」など、一年間の課題作品を展示した「レビュー展」が行われました

アートクリエイターコース（Creative Arts Practice〈CAP〉）では、4年間で100人の様々なクリエイターに出会い、「卒業時には自分自身が101人目のクリエイターになる！」という「101人のクリエイター One Hundred and One Creators(OHOC)」プロジェクトを実践しています。

担当教員の西村正幸から始まり、松岡徹(造形作家／CAP非常勤講師)、生川晴子(画家)、神戸峰男(彫刻家／造形科教授)、ウルリケ・ドニエ(ドイツ人画家)、ジグルン・グンナシュドティエ(デンマーク人家)、尾崎幸(絵本作家)、尾野豊三(はんこ職人)、ジャウマ・アミゴー(カタルーニャ人造形作家)、栗木義夫(現代美術家／デザイン学部非常勤講師)まで10名を前期、澄川喜一(彫刻家／本学特別客員教授)設楽知昭(画家／美術文化学科非常勤講師)、岩井義尚(CAP准教授)、坂本夏子(画家)、バーベル・カスペレク(ドイツ人造形作家)、フリッツ・P.ケルム(ドイツ人画家)、北村暢(現代美術家)、塩津丈洋(苔盆栽職人)、菅原真弓（学芸員）、コブ、クン、トウン（以上3名タイ人版画家）、伊藤里佳（画家）の13名を後期、計23名に出会いました。〈敬称略〉

毎回2時間程度、大学に招いたり、出かけて行き、話を伺った後、質問がなかなか途切れない程熱心に聞き取り、2週間後にはA4一枚に、人に伝わるようにまとめたレポートを提出します。この『OHOCレポート』、読むのが楽しみなぐらい、バラエティーに富んだ内容です。

昨年12月に招いたクリエイターは苔盆栽職人の塩津丈洋さん。本学デザイン学部のスペースデザインコースを卒業と同時に、東京の苔盆栽職人に弟子入りしたエピソードから仕事の内容へと話を進め、後半は実際に苔玉作りのワークショップを行いました。何よりも、塩津さんの『伝える力』が、学生たちに浸透したことがうれしい講座でした。

この『OHOCレポート』も含み、第1期生の1年次に制作した課題作品を、2009年1月14日(水)～18日(日)の期間、名古屋市民ギャラリー矢田第2展示室にて「レビュー、アートクリエイターコース、デビュー！」と題して展示しました。

美術学部アートクリエイターコース准教授　西村正幸

人間発達学部

人間発達学部　文化創造セミナー「身体と心をつなぐふれあい遊び」が行われました

2008年12月13日、北名古屋市健康ドームにて、講師に大妻女子大学教授でNHKの8代目「体操のお兄さん」である瀬戸口清文氏をお迎えし、人間発達学部の文化創造セミナー「身体と心をつなぐふれあい遊び」が開催されました。会場には、人間発達学部の1年生、2年生のほか、近隣の保育園・幼稚園の教諭、同校卒業生など、約300人の参加者が身体を動かしながら、運動遊びについて楽しく学びました。

体を動かし、心が弾む――、ふれあいから生まれる遊びの和

幼児の運動遊びと表現指導法のエキスパートである瀬戸口氏は、元気いっぱいに姿を見せ、さっそく参加者とともに歌い、アリーナを楽しい雰囲気に包みました。座った姿勢で音楽に合わせて手を使って踊ったり、歌ったり、参加者とひとしきり楽しんだ後、世阿弥の『花鏡』の中にある言葉、「離見の見」を紹介。これは「観客が見る役者の演技は、離見（客観的に見られた自分の姿）である」ということで、すなわち離見を自分自身で見る冷静な目が必要であるということだとか。もうひとりの自分をもっていながら、自分も楽しもうと話しました。そして楽しむなかにも、子ども達の姿を想像する、子ども達の安全を確認するという客観的な目が必要だということを話しました。

次に立ち上がっての跳躍運動です。ここでも、「緩急強弱」を使い分けながら子ども達の心を引きつけることが大切であるとポイントを抑えながら、音楽に合わせて動き回ります。

良い指導者とは、分析しながらやりかた（方法）を教えることができる人といい、やってみせながら真似をさせるためには、自分ができるようになることが大事と参加

者を励ます。「Simple（シンプル）is best」であり、「Sample（サンプル）is best」であるとユーモアを交えながら話しました。また「いまの子ども達に大切なのは"じゃれつく"こと」といい、ふれ合う遊びが大事と説きます。歌の途中で体をふれる表現を取り入れたり、抱きついてみたり、スキンシップを取り入れる方法を見せてくれました。

さらに、「上手よりも情熱」と話し、一生懸命な姿を見せる先生は愛される。失敗してもやってみることが大事だといいます。今年で活動35年を迎えたという瀬戸口氏は、これまでの経験から、「響く！響き合う！」ことがキーワードであり、Education（教育）ではなくEducare（共有）であると強調します。

瀬戸口氏は、次々と運動遊びを紹介していき、子ども達は「ヨーイ！ドン！」が大好きということで、拍手をする競争をしたり、大きな声で掛け声を出したりしました。声を出すことはとても大事で、明るく言葉をかけることを覚えるようにとアドバイスしました。また、キーワードとして「できるかな？」という言葉を紹介。一番大切なのは、子ども達の心が自己肯定感に満たされることだと話します。また、子どもは鬼ごっこが大好きだが、逃げることが好きなのではなく、捕まえられたいから好きなのだといいます。

近年、子ども達の体力の低下が危惧されるなか、文部科学省へ提案したというビニール袋を使った遊びを披露。ゆっくりと落ちてくる袋を捕まえたり、2人で交換キャッチしたり、大勢で捕まえ合うなどの遊びを、参加者も夢中になって試してみました。

ところどころでキーワードをちりばめながら、歌い踊り、飛び跳ね、童謡の「七つの子」を手話で歌ったりと、楽しい時間が過ぎていきました。「心が動けば体も動く！体が動けば心も弾む！心弾んで感じて動くから感動する！！」という瀬戸口氏の言葉通り、参加者も大いに体を動かし楽しみながら学んだセミナーとなりました。

真剣な表情で瀬戸口氏の話を聞く参加者

参加者と瀬戸口氏の熱気が伝わる会場風景

両手両足を動かす場面では歓声が上がる

童謡「七つの子」を手話で歌う

ビニール袋を使って、キャッチする遊び

円形のシートを皆で持ち上げ大きく膨らませる

大学 大学院

第19回　生涯学習大学公開講座

開催期間：2008年9月～12月

両キャンパスの講座の一例を紹介しました

東キャンパス

講座名：木管五重奏の愉しみ
講　師：演奏学科教授　竹内雅一
　　演奏学科講師　依田嘉明
開講日：火曜日
時間帯：18:00－19:30

この講座は、木管五重奏（フルート、オーボエ、ホルン、ファゴット、クラリネット）の名曲を解説しながら演奏することにより、このアンサンブルの持つ魅力を感じてもらい、また、演奏に参加することによって木管五重奏のすばらしさを体感し、更なる魅力を探っていただくことを目的としたものです。

受講生にお話を伺うと、「木管楽器だけの音を、普段あまり聞くことが無いので、音を聞きたくて受講している。シンセサイザーの勉強をしているので役に立ちそうです。」と話していました。

開講して3回目となった11月11日（火）の講座では、演奏曲の解説の後、講師2名と学生3名による五重奏が行われました。その後、ファゴットのパートに女性の受講生が参加し、これまで解説されてきた曲目の一部を演奏しました。講師の先生に負けず劣らぬ演奏でした。

西キャンパス

講座名：体験！リトグラフ
　　～多色刷り石版画で作品を～
講　師：非常勤講師　片山　浩
開講日：金曜日
時間帯：18:30－20:30

この講座は、カラフルな色が特徴のリトグラフを体験して小作品やグリーティングカードを制作することが目的で、簡単な額装の方法も紹介されます。

全8回のうち5回目であった11月14日（金）の講座は、3版3色の内、一色目の刷りの工程でした。講師のアドバイスを受けながら、受講生はインクを印刷用ゴムローラーに延ばし、描画・製版を終えた版にインクを盛っていました。はじめは素早く、後からゆっくり転がして何回かインクを盛り、紙を置き、あて紙、ティンパンをしき、圧をかけて刷っていました。

初心者の方にお話を伺うと、「リトグラフは、やったことが無く、自宅では出来ないので参加している」とのこと、また熟年の男性は、「版画の講座を探していて、この講座を見つけた。出来上がりが楽しみです。」と話していました。

Column NUA No.6

民衆の芸能がおもしろい

音楽学部教養部会 准教授 大田高輝

徳島の阿波踊り、岐阜の郡上踊り、富山の越中おわら節などなど、今日においても地域に根ざして踊り継がれている日本の民衆の芸能があります。近年、幼稚園や小学校などの教育の場で、子どもたちが地域の伝承芸能を教えてもらったり、ロック（よさこい）ソーラン節やよさこい鳴子踊りなどに取り組んだりする教育実践も全国的に見られるようになってきています。日本の芸能に寄せられる関心は着実に高まってきている感があります。

盂蘭盆会に徳島市へ阿波踊りを一観客として味わいに行ってきました。いわゆる有名連の「鳴り物」の巧みさや「踊り子」の腰の座った踊りに「さすが本場の阿波踊りだ！」と魅了されると同時に、徳島の大学の学部・学科やクラブ・サークルも含めた「連」の数の多さに、「さすが地域にしっかりと根ざした文化だ！」と感心したりもしました。夏の一夜はあっという間に過ぎ去りましたが、民衆の地域生活に根ざした芸能は、わたしの心とからだにこうした手応えのある躍動を残してくれました。

一昨年（2006年）12月に「改正」された教育基本法では、その第二条（教育の目標）の第五項の冒頭に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」という文言が条文化されました。国家が法律で「我が国と郷土を愛する」と教育の目標を規定すること自体が国民の基本的人権の侵害にあたるのではないか

保育・福祉専門学校

学校祭・公開コミニュティー講座が開催されました

学校祭

今年も恒例の学校祭が2008年11月8日(土)に開催されました。

当日は時折小雨も混じるという生憎の天候でしたが、地域の方々、来年入学予定者も訪れて学園は楽しく、活況に充ちていました。

開催には、実行委員を中心に保育、介護の学生達が、「環境を考える」をテーマに限られた時間の中でクラスごとにエコバックデザインと展示、パネルシアターや点字体験などに知恵とパワーを発揮しました。

各ブースとも参加したり、体験したり、音楽を楽しんだりしていただき、また模擬店では長い行列も出来、学生達の祭典は無事終わりました。

公開コミニュティー講座

学校と地域とのふれあいを通し、本校の良さを発信し関心を高めていく趣旨の公開コミニュティーも第4回を迎えました。

人気の「絵手紙」の講座は山田智治講師の指導で参加者達は熱心に受講され、思いが込められた作品を何枚も完成させていました。

クリエ幼稚園

幼稚園児たちのゲイジツ展が行われました

2008年11月14日(金)～19日(水)まで、本学西キャンパスのアート&デザインセンターで、附属クリエ幼稚園年長園児たちが制作した作品展が行われました。

この作品展は今年で10年目を迎えました。毎年、9月初旬に年長の2組がそれぞれに4日ずつ美術学部にやって来て、版画工房で、銅版画・リトグラフ・紙すき・木工ボンドのステンドグラスなどの作品を作ります。版画コース及びアートクリエイターコースの教職員と学生たちがアシスタントをつとめ、大学生と同じ専門的な実技体験をします。こうして出来上がった作品がギャラリーに展示されました。

とても伸びやかな作品が出来上がり、また制作風景もスライドショーで上映されたので、その生き生きした様子が印象的でした。

会期中の17日(月)には、西村正幸准教授の指導の下、年中園児親子によるワークショップが行われました。親子でギャラリーの外に出て、木の葉や壁面、フェンスなどの上に紙をのせ、色鉛筆やクレヨンでフロッタージュ(こすり出し)しました。それを好きな形に切って色画用紙にコラージュ(貼り絵)し、カードを作りました。子どもから親へ、親から子どもへ「あなたがいてくれてありがとう」の心をこめたカードが出来上がりました。

親子で「作る楽しさ」を味わうことの出来たひと時となりました。

滝子幼稚園

恒例の「クリスマス会」が行われました

2008年12月12日(金)に滝子幼稚園2Fホールでクリスマス会を行ないました。飾り付けられたクリスマスツリーを見て子ども達はおおはしゃぎでした。

まずこの日のために練習してきた歌や劇を披露。年長ふじ組は歌「そうだったらいいのにな」劇「大きなかぶ」、ゆり組は歌「あっという間のクリスマス」劇「三匹のヤギのガラガラドン」です。大きな声で演じ、2月の生活発表会に向けて自信を持つことができたようでした。

年中かんな組はピアニカ「オーレ！チャンプ！」歌「サンタクロースが町にやってくる」、たんぽぽ組はピアニカ「サンタクロース」歌「赤鼻のトナカイ」です。大勢の前で演奏するのが初めてで緊張した様子でしたが、上手に演奏することができ、やり遂げたという達成感に、顔を輝かせていました。

年少さくら組は「あわてんぼうのサンタクロース」を唄いながら合奏してくれました。練習ではあっちを向いたりこっちを向いたりだったのが、ステージに上がりみんなの前に立つと立派に前を向いて、大きな声で歌うことができました。

最後に鈴の音にのってサンタクロースのおじいさんが登場し、楽しい時間を過ごすことができました。

という大いなる疑念がありますが、今日の時代が確実に、いわれるところの「伝統と文化」の内実が何であるかを問うている気がします。はたして、「伝統と文化」の中身が、秩序維持のための支配者層の統治の「道具」と化してしまうのか、それとも働く国民の生きがいとして生命力再生産となる希望を持ちえるのか、今後の文化動向の重要な焦点となってくるでしょう。

もちろん、踊りが楽しい、まつりが楽しいという素朴な感情を云々するつもりは毛頭ありませんが、ことそれが行政機構や教育活動に取り込まれていくとき、わたしがいま問題意識に据えている「本当に『民衆』のものかどうか？」という「思想」が重要になってくるような気がしてなりません。言い換えるならば、その踊りをはじめとする芸能が農民や漁民など働く民衆の生活に由来しているかどうかという点もさることながら、現代その芸能に取り組む中心的な主体が働く国民そのものかどうかが重要なのです。

わたしも、一昨年度、愛知の小学校で請われて子どもたちと民衆芸能に取り組む機会をいただきました。子どもたちは、わらび座由来のソーラン節にこめられた漁師さんたちの想いや、郡上踊りのかわさきにこめられた農民の方々の想いに迫ろうと、熱心に踊りの練習をしてくれました。はじめは体が動かなくて顔が引きつっていた子どもたちも、予想を超える体の動きや笑顔や労働の価値を伝える表現力などを見につけ、懸命に自己表現に取り組んでくれました。そしてクラスみんなが力を合わせて学習発表会を作ってくれました。

働く国民や子どもたちが主人公となる民衆の芸能こそが、いま、おもしろいのです。

(2008年12月)

マスター to アーティスト

【第6回】
＜たった一人のオーケストラ＞

鷹野雅史 音楽学部 准教授

1961年　神奈川県生まれ
1981年　尚美高等音楽学院（現 東京ミュージック&アート尚美）卒業
1980年代～　ヤマハ本社専属エレクトーンデモンストレーター、プロ活動を開始
1987、88年　ヤマハコミュニケーションセンター（NEW YORK）勤務。在米、NYに訪れる多くの世界の一流ミュージッシャンと交流を持つ

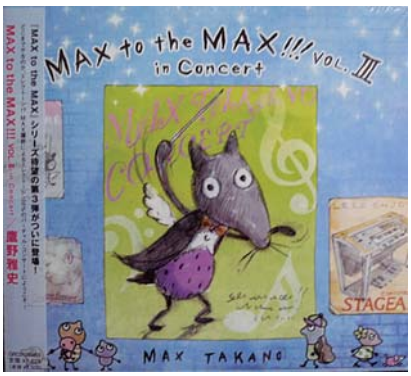
MAX TAKANO名義で、英国で4枚のアルバムをリリース。国内では2005年に『MAX to the MAX!』、2006年に『MAX to the MAX!! VOL.II More ORCHESTRA to go!!』。そして、2008年12月『MAX to the MAX!!! VOL.Ⅲ in Concert』をリリース。

「楽器から音が出て、聴く人の耳に入ったときに『絵』が浮かんで欲しいと思うんですね、例えば…」話もそこそこに、研究室の一角にあるエレクトーンにおもむろに腰掛ける。電源を入れ、いくつかのスイッチを手際よく操作しながら、「例えば、オーケストラの絵を描きたいと思うと、こんなことから始まるんです…」　鍵盤に指を置くとオーボエの音色。「A」の音が響くと、ストリングス、管楽器、打楽器が加わっていく。オーケストラのチューニングの風景だ。一瞬にしてホールの情景が浮かんでくる。コンサートが始まる前の期待感、あのワクワクするような感覚に、我知らず心が踊ってしまう。そして、「カッ、カッ、カッ」とタクトを叩く音が加わり、チューニングは終わる。これには思わず笑いがこみ上げる。エレクトーンという楽器が持つ能力は、どうやら音楽を奏でるものだけではないらしいということが理解できる。そして、その演者にも、いわゆる演奏家というだけではない何か別の資質が必要なことに気付かされる。ピアノの奏者は技術や表現力を追求するが、エレクトーンではもっと別の素養が必要という。しかし、紛れもなく音楽家としての素養。

エレクトーンという楽器は、ヤマハ株式会社が保有する登録商標で、いわゆる電子オルガンである。鍵盤を用いる楽器の代表といえばピアノだが、用いられる技術はピアノとは全く異なる。また、鍵盤を用いた電子楽器にはシンセサイザーがあるが、エレクトーンは、自由に音を創造することのできるシンセサイザーとも、似て非なる楽器である。演奏の技術をひたすら磨くのがピアノ、どこまでも音を創造して作り上げいくことができるのがシンセサイザー。エレクトーンの立ち位置は微妙で、演奏技術を研鑽するという点ではピアノ、音楽の可能性を広げるという点ではシンセサイザーに、その地位を譲ることは否めない。

エレクトーンにできることは何か？

最大限エレクトーンの持ち味を発揮できることはどんなことか？　そんな問いの答えを求めて、自分にできること、面白いと感じることにすべてを注いできた。



最近リリースされた３枚目のアルバム
『MAX to the MAX!!! VOL. Ⅲ in Concert』

MAX TAKANO
Concert Schedule 2009

3月 20日… スタイリッシュコンサート
　　～藤枝市民会館
21日… ジョイントコンサート
　　～大東私立総合文化センター
4月 26日… メモリアルコンサート～アクトシティ浜松
5月 10日… コンサート～千葉県民会館
6月 28日… Live at MIKI～三木楽器心斎橋店
7月 20日… コンサート～結城市民文化センター

このほかに、１月に地元の小学校で
子どものための演奏会を行った。

幅広いレパートリーとエンターテイメント溢れるワンマンオーケストラのコンサートは、どんな人をも魅了する。世界31カ国を歴訪、海外にも多くのファンを持つ。

音楽をこよなく愛する教育者である父の許で、音楽家になるように育てられた。胎教にヴィヴァルディ、生まれてからも常に周辺には音楽が絶えることなく流れるような環境だった。そのかいあってか、物心の付く頃には絶対音感を身に付けていたという。喜んだ父親はすぐさまピアノを買い与え、音楽にいくらでも触れられるように近くのレコードショップにツケが利くように頼み込んでくれた。恵まれた環境の中、好きなだけ音楽に没頭することができた。楽器の練習もそうだが、それ以上に聴くことを楽しんだ。クラシックに始まり、ジャズ、ビートルズ…、当時リリースされるレコードを片っ端から聴いていったという。体の隅々まで、音楽に浸りきった日々…。

そんな経験が、エレクトーンと出会ったとき、一挙に開花したのだろう。ピアノでもなく、シンセでもない。エレクトーンに必要な演奏性と発想。体に入っている音楽が、エレクトーンを通して様々な世界を見せてくれる。２段のマニュアル（手）鍵盤と足で弾くペダル鍵盤。それぞれに異なる音色を割り当て、あるときはフルオーケストラ、またあるときはジャズ・コンボ、はたまた雅楽隊…、とまさに変幻自在、当意即妙に変化する。そして、そのどれもが音楽だけで鮮やかな情景を描き出す。観客は手品でも見るように、エレクトーンの音の世界に引き込まれ、描き出される情景に心を遊ばせるだけ。目くるめく“TAKANO WORLD”に酔いしれるばかりとなる。

取材する中でも、次々と音楽が奏でられる。ジャンルを超え、年代を超え、古今東西のあらゆる音楽が縦横無尽に現れる。そして、それらは楽譜もなく、構えることなく、体中から溢れ出てくることに驚く。ジャンルや楽器にとらわれない、もっと包括的な「音楽」というものを知っていなければ、できないことだろう。

「似顔絵を描いて行くことに近いかもしれません。テクノロジーに人間のフィルターを通して、どうデフォルメして見せるか。技術よりも、演者の中身や音楽が問われるものなんですよ」

ピアノのようなストイシズムとはまた違った、それでも紛うことなき芸術の世界が垣間見られた。

2009年2月以降の主な行事・イベントスケジュール

音楽学部

■ 平成20年度 研究生修了演奏会
2月12日(木)18:00開演
電気文化会館　ザ・コンサートホール

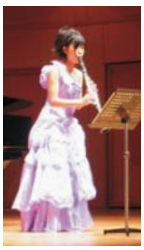
■ 特別客員教授 森山威男 公開講座
2月12日(木)・19日(木)15:00～
本学東キャンパス 2号館大アンサンブル室

■ 大学院音楽研究科特別演奏会
2月13日(金)18:00開演
電気文化会館　ザ・コンサートホール

■ 第7回 歌曲の夕べ
2月14日(土)18:30開演
電気文化会館　ザ・コンサートホール

■ 第13回 春のコンサートピアノのしらべ
2月21日(土)17:30開演
電気文化会館ザ・コンサートホール

■ 第36回 卒業演奏会
2月25日(水)・26日(木)18:00開演
しらかわホール



■ アンサンブル・フィラルモニク・ア・ヴァン
第10回 定期演奏会
2月27日(金)18:30開演
愛知県芸術劇場　コンサートホール

■ 大学院音楽研究科 第11回 修了演奏会
3月3日(火)・4日(水)・5日(木)
3日間とも18:30開演
しらかわホール

■ ミュージカル公演「PrettyMighty Jeanne!～オルレアンの聖少女～」
3月13日(金)18:30開演
3月14日(土)14:00開演
名古屋市青少年文化センターホール

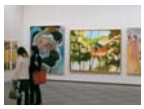
■ 第31回 オペラ公演
「カヴァレリア・ルスティカーナ」
3月18日(水)18:30開演
中京大学文化市民会館　ブルニエホール

■ 打楽器アンサンブル 第4回 だべや
3月21日(土)15:00開演
本学東キャンパス 2号館大アンサンブル室

■ 名古屋芸術大学オーケストラ
ワークショップ
3月26日(木)・27日(金)9:30～
本学東キャンパス2・3号館
<オーケストラ演奏会>
3月27日(金)17:00開演
3号館音楽講堂ホール

美術学部　デザイン学部

■ 第36回卒業制作展
2月24日(火)～3月1日(日)
愛知県美術館ギャラリー　10:00～
名古屋市民ギャラリー矢田　9:30～
本学西キャンパス　10:00～



■ 第13回大学院修了制作展
デザイン研究科
2月24日(火)～3月1日(日)
愛知県美術館ギャラリー　10:00～
名古屋市民ギャラリー矢田　9:30～
美術研究科/デザイン研究科
3月3日(火)～3月8日(日)
名古屋市民ギャラリー矢田　9:30～

人間発達学部

■ 子育て支援イベント
3月21日(土)・22日(日) 10:00～
愛知県体育館

■ 大学卒業式
3月24日(火)11:00～
中京大学文化市民会館

名古屋保育・福祉専門学校

■ 進学相談会
2月7日(土)10:00～

■ 入学選考日
2月15日(日)
3月　7日(土)

■ 卒業式
3月18日(水)10:00～

幼稚園(クリエ)

■ 新入園児入園説明会
2月21日(土)10:00～

■ お楽しみ会
3月3日(火)10:30～

■ お別れ会
3月12日(木)13:00～

■ 卒園式
3月14日(土)10:00～

幼稚園(滝子)

■ 生活発表会
2月22日(日)

■ 一日動物園
2月26日(木)

■ ひな祭り会
3月3日(火)

■ 卒園式
3月17日(火)

※予定は変更になる場合がありますので、
事前にご確認ください。

編集後記

今号は、昨年4月、デザイン学部に新たに設置されたメディアコミュニケーションデザインコースを特集しました。まだ、学部のファンデーション(1年次)を終えた2年生だけのコースですが、写真の撮影や現像・版画など基本的な表現技法の習得に多忙な毎日を送りながらも、指導教員の下、全員で協力してプロジェクトワークに取り組むなど、充実した学生生活を送っている姿を追いました。

NUA-ism　STUDENT　は、4月からやっと3年生になる人間発達学部の学生を、このコーナーでは初めて取り上げました。保育士や幼稚園・小学校教員をめざしている男女2名にお話を伺いました。

ニュース&トピックスでは、音楽学部は、オーケストラ演奏と映像を組み合わせた新しい形態のコンサートである「ザ・ルネッサンス21」を、また、昨年末に本学東キャンパス3号館音楽講堂ホールで行われた「ヤングジャズサミット2008」などを取材しました。

美術・デザイン学部は、日本画コースが2年間の歳月を掛けて取り組んできた「聖母の御眠り　模写展(名古屋展1月20日で終了)」や、デザイン学部の特別講演会などを取り上げました。人間発達学部は大好評だった文化創造セミナーを取材しました。

キャンパスは卒業シーズンを迎え、卒演や卒展の準備に忙しい学生達で賑わいを取り戻しています。

本誌へのお問い合わせやご意見は下記のメールアドレスまでお寄せください。
geibun@nua.ac.jp

大学基準協会の認証評価に合格しました

本学は2006年4月に、認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。認定期間は、2006年4月から2011年3月までです。これによって、法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

メディア&コミュニケーションブロック
メディアコミュニケーションデザイン
選択コースのみなさん
リニモの前にて

発　行:名古屋芸術大学
編　集:全学広報誌編集委員会
制　作:(株)クイックス
発行日:2009年2月10日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学　芸術文化交流室
〒481-8535
愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
電話　0568-24-0325
Fax　0568-24-0326
E-mail　geibun@nua.ac.jp